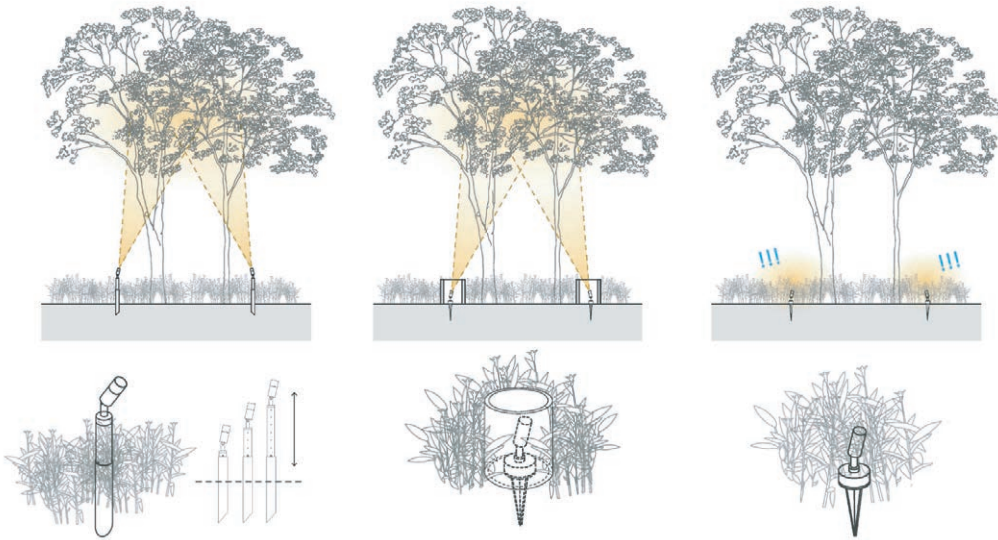




5. 緑

都市の中の自然や緑は、四季の変化を味わうことができる貴重な要素。夜間においても緑を引き立たせることが、魅力ある夜間景観をつくるうえで重要なポイントとなる。

手法例 | 植栽がある環境



低めのポールを用いると植栽が伸びても覆われにくい。

照明器具に囲いを設けると植栽に覆われにくく、堅牢性が高くなる。

【失敗例】

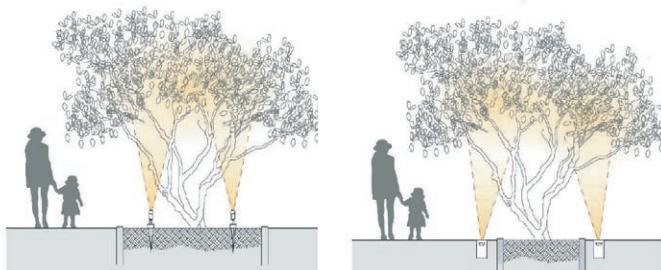
照明器具が植栽に覆われると光が遮られて期待する効果が得られない。

💡 樹木の照明

樹木のアップライトは、地面からの投光照明により葉や枝を浮かび上がらせる照明手法が一般的に用いられている。

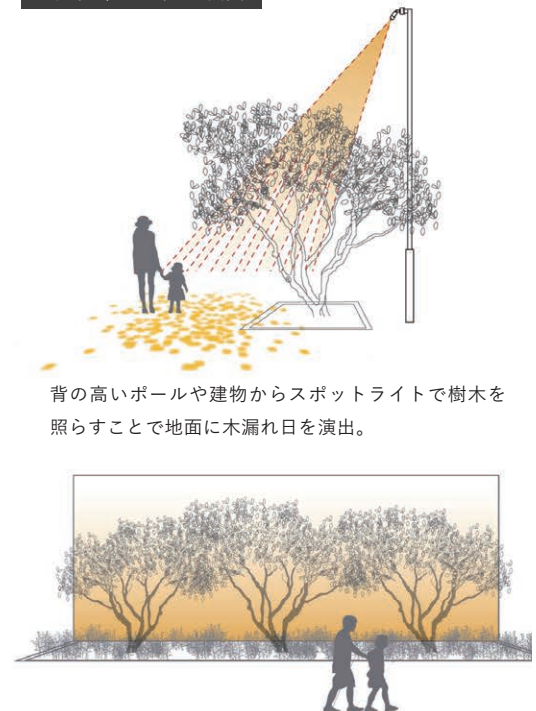
落葉広葉樹は枝葉の密度が薄いため光がよく通り抜けるので樹冠まできれいに照らすことができる。反対に常緑広葉樹や針葉樹は枝葉の密度が濃く光が通り抜けにくいので樹木のアウトラインを照らすようにするとよい。

手法例 | 植栽がない環境



通行人にグレアを与えないように照明器具の配光と向きに注意。

手法例 | その他の演出



背の高いポールや建物からスポットライトで樹木を照らすことで地面に木漏れ日を演出。

【失敗例】

スポットライトの配光が広過ぎるとそばを通る通行人の視覚に入りまぶしさを与えてしまう。

建物の壁面など鉛直面を照らすことで樹形をシルエットでドラマチックに演出。



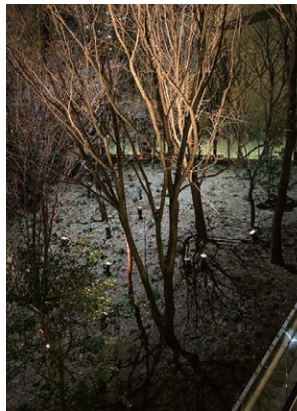
地中埋設型灯具による樹木照明の事例



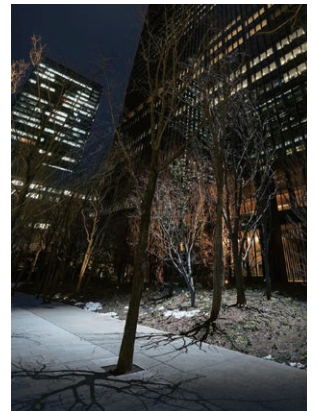
幹にスポットライトを設置して枝越しに地面を照らしている事例



スパイク式スポットライトによる樹木照明の事例



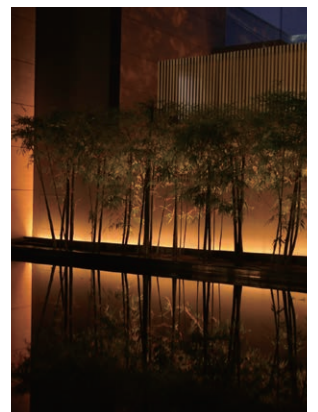
高い位置から投光器で照らされた樹木の事例
木のシルエットが地面に投影されている。



架台にスポットライトが設置されている事例



左) 後ろの壁面を照らして樹形のシルエットを浮かび上がらせる事例
右) 樹木のシルエットと水面の映り込みをつくっている事例



樹木手前の離れた位置から照らした事例
真下から照らした場合と比べて明暗のコントラストが小さくなる。



季節限定のライトアップの事例
樹木の色彩が引き立つように、桜は白色より、紅葉は暖かみのある光源を用いるとよい。

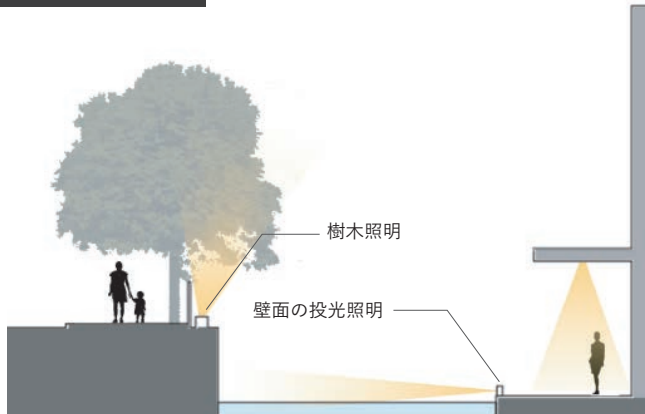




6. 水辺

昼間は太陽の光で輝き、美しいゆらぎや波紋をつくりだす水辺が、夜には闇に埋もれてしまう。照明を用いて、ゆらぎを蘇らせたり、映り込みをうまく利用することで、昼とは違った水辺の魅力を演出することができる。

手法例 | 街中の小川



💡 川辺の照明

夜間に安全で快適に過ごすことができる川辺をつくるには、適度な明るさと暗さのバランスが重要。護岸や樹木など川辺の要素を照らすことで明るさ感が生まれる。足元が不安定な場所には安全確保のためポラード照明で明るさを補うとよい。



鉛直面を照らすことで、空間の明るさ感が向上する。



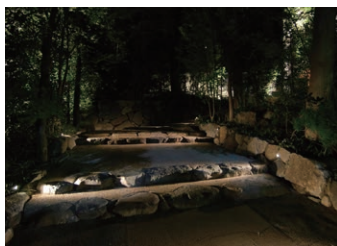
暗所では、安全な通行のためにポラード照明で足元に光を配置するとよい。

💡 庭の照明

池のように動きがない水面は鏡のように景色を映し出すことができる。水面は暗く保ち周囲の樹木などを照らすと効果大。



動きがない水面は鏡のように景色を映し出すことができる。



石垣に隠れるようにスポットライトを設置して日中の景観にも配慮。

💡 小川や水路の照明

水面と接する壁面を照らすと、光が水に反射して明るさが増幅される。水面への映り込みや反射の効果を積極的に取り入れることで美しい水景をつくれる。

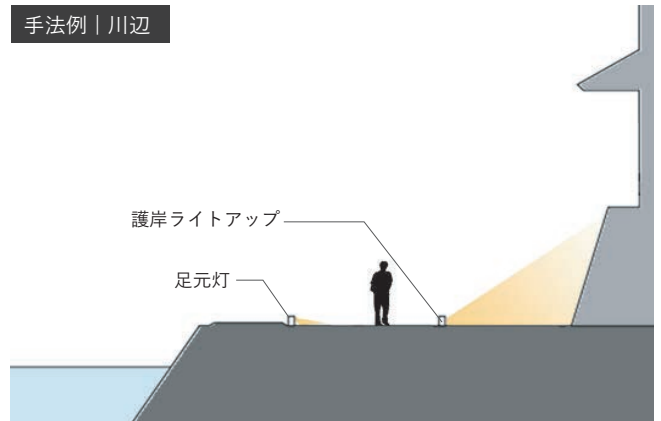


護岸を照らして演出した事例

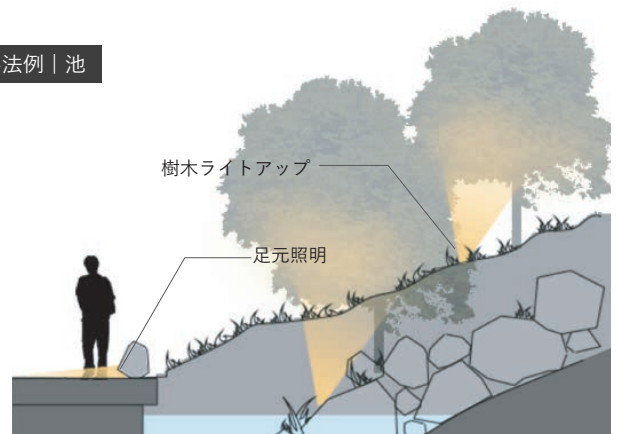


軒下に照明器具を設置した事例

手法例 | 川辺



手法例 | 池



7. 屋外広告物

広告物や広告照明の技術が進み、動きのあるものまで様々なタイプが登場している。特に飲食店の多い地域では屋外広告物が夜の景観をつくりだす大きな要素。適切な明るさや色を選ぶことで地域と調和しつつ人々を引き付ける。

💡 看板照明

屋外広告物の照明ポイント

■周辺環境に適した色温度の光源を使用すること

オフィス街、商店街、住宅街など環境の違いによって光源の色温度の使い分けも大事。オフィス街や明るい商店街では白色系の光源も似合うが、小路や路地など落ち着いた雰囲気のある場所では暖かみのある電球色が好ましい。特にプレート看板やスタンド照明は、通りの景観形成に影響するため気をつけたい。

■適切な明るさで眩しくないこと

同じ看板照明でも設置環境によって見え方が異なる。看板の背景が明るい場所ではちょうど良い明るさであっても、暗い場所では明暗のコントラストが強くなるため眩しく感じてしまう。看板を魅力的に目立たせつつ、眩しくならないように明るさを計画することが必要。

■照明器具の取付位置と照射方向が適切であること

看板を照らす照明は、近隣や通行人に対して眩しさを与えてはいけない。灯具の取付位置と照射方向に気を付けて、灯具の配光を考慮したうえで計画することが大事。特に住宅地の立て看板やスタンド看板など迷惑光になりやすいため注意。



スポットライトを用いた看板の事例
通行人にまぶしさを与えないように照射方向に注意し、看板だけを照らすようにしたい。



行灯型看板の事例
光量が多すぎるとまぶしくなるため明る過ぎにも注意、明かりが均一に見えるのとさらに良い。



電球色の看板照明の事例
電球色の光は落ち着いた雰囲気になる。



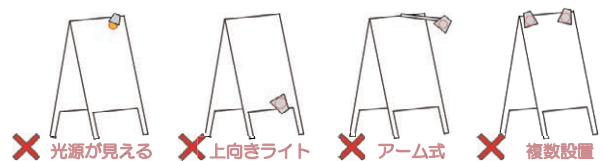
白色の看板照明の事例
白色の光は活気を感じさせる。

京都市屋外広告物条例上の看板照明の規制

- ・過度にまぶしいものの市内全域での禁止
- ・点滅式照明、可動式照明の市内全域での禁止
- ・照明色及び色の数について屋外広告物の規制地域ごとに規制

※地域によっては、照明装置が公共用空地から容易に見えないように工夫が必要です。
詳細は広告景観づくり推進課までお問い合わせください。

(照明装置の設置不可の例)



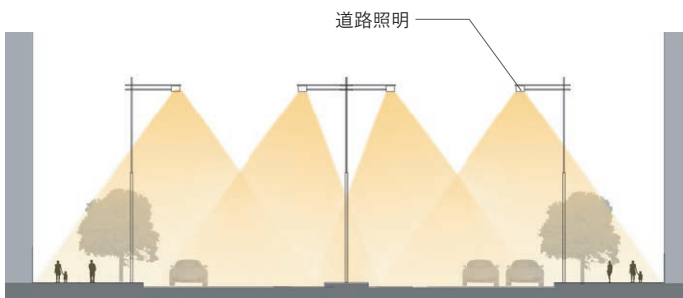


手法例 | 道路

8. 道路

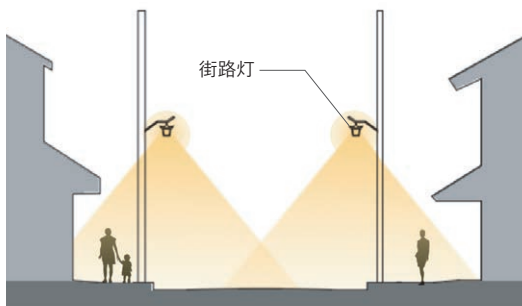
都市インフラである道路照明は、一定の明るさを保つための照明器具の配置と路面輝度が求められる。さらに舗装やまち並みと一体的に整備することで、安心・安全だけでなく、まちの雰囲気も作りだすことができる。

💡 幹線道路の照明



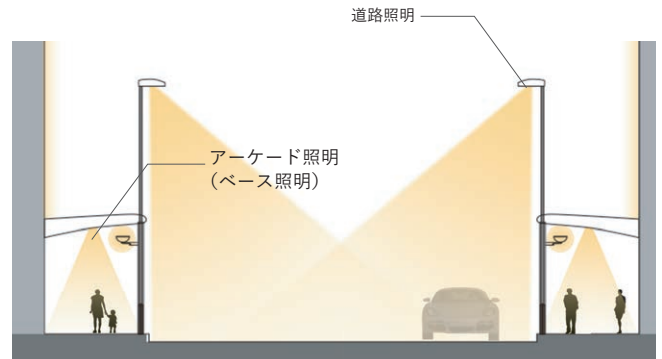
幹線道路では高さ 10 メートル程度の照明ポールに道路専用の照明器具が多く使用され、道路照明施設設置基準に基づき均一な照度を確保することが求められる。照明ポールの低い位置に歩道用の照明器具が設置された兼用タイプもあるが、一般的には車道専用タイプが多く使われる。車道専用タイプを用いる場合は、歩道が暗がりにならないよう歩道範囲をカバーする配光の灯具を選ぶとよい。街路樹がある場合には光が遮断されないように注意が必要。

💡 住宅地域道路の照明



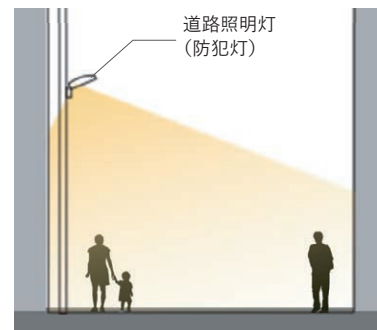
住宅地等の道路では高さ 4～6 メートル程度の照明ポールに発光タイプの照明器具が多く使用されている。特に道幅が狭い道路では、街路灯の光が住宅の窓から室内に侵入して障害光になる場合も少なくない。周辺住宅に対して配慮した灯具の配置と選定、さらには遮光性能についても考慮することが大事。

💡 市街地道路の照明



市街地の道路では高さ 5～8 メートル程度の照明ポールに道路専用の照明器具が多く使用され、道路照明施設設置基準に基づき均一な照度を確保することが求められる。道路と沿道のビルの距離が近い場合、道路照明の配光が広すぎると周囲のビルに影響を及ぼす場合があるのでグレアに配慮したカットオフ型の灯具の選定が必要。歩道には高さの低いポールや、アーケードの場合はダウンライトや意匠照明で計画する。

💡 路地の照明

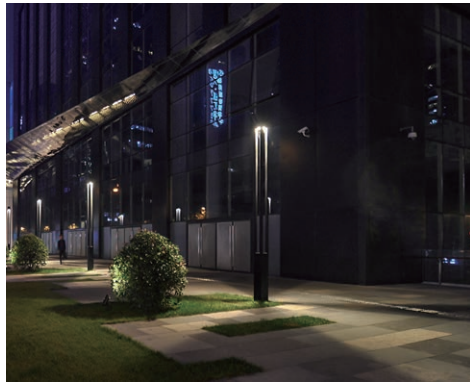


路地では一般的に暗くて通行に支障がある場所や、防犯上不安のある場所に防犯灯と呼ばれる街路灯が設置されている。近年普及が進んでいる LED 光源の防犯灯は、従来光源のタイプと比べて鋭い光のためグレアになりやすい。灯具を選ぶ際には遮光板やルーバーがついたものを選ぶとグレアを抑えられる。最近では発光効率の高い電球色の LED 防犯灯も登場している。

💡 適切な配光制御

広範囲に効率良く光を届ける道路照明や街路灯は、配光が広い分周囲にグレア（不快なまぶしさ）を与えやすく光害にも繋がりがやしいため注意が必要。設置場所の配慮だけでなく、灯具の中の光源が周囲からなるべく見えにくい照明器具を選定することでグレアが軽減されて道路と背景の視認性も高まる。

○ 適切な配光制御がされていてグレアが少ない様子



× 適切な配光制御がされておらず unnecessary 光がある様子

